

昨年九月の日中国交樹立以来、はや一年になろうとしている。この間、ベトナム和平も実現し、アジアの将来にも光明が見えはじめてきた。だが同時に、世界がますます多極化するなかで、国際政治の流動が激しく、ことに中ソ対立はアジアの将来にもさまざまな波紋を投じて拡大しつつある。

こうした国際環境の変化のなかで日中関係正常化の意味をふりかえてみると、たしかに日本外交の幅は著しく拡大され、国際政治の新し

●外交時評

日中国交一年の現実

中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)

い展開にそれだけ寄与し得るようになったが、一方、多極世界の日本への挑戦がじわじわと開始されている事実も否めないであろう。

さて、問題を日中関係にしぼるなら、この一年間、日中間の全般的交流は大いに促進され、廖承志訪日団や劉希文経済使節団の訪日、最近では植村訪中団の実現など、重要な日中交流も相次いでいる。だが同時に、昨年の日中共同声明で約束された日中間の実務的な諸協定は、右のような日中交流の活発な展開にもかかわらず国交一周年の今日、どれも実現の運びにはい

っていない。これらの問題は、国交樹立後たちには解決を見、日中平和条約も数カ月のうちに締結されるだろう——というのが大方の新聞論調であつただけに、右の事実にはやはり注目せざるを得ないのである。懸案の日中記者交換の問題が、国交樹立後も急速には進展せず、依然として国交樹立以前と原則的な変化がないことも指摘しておく。

実務協定のなかでその実現がまず第一に合意されたはずの航空協定については、最近帰国さ



れた小川大使の談話にもあるように、まだまだ時間がかかりそうであり、日本航空だけで往復週五十便以上の定期航路が活況を呈している現実には、やはり無視しがたいものがある。通商貿易協定については、大筋の合意がすでに成つたと発表されたが、まだ調印にはいたっておりず漁業協定や航海協定はこれから本交渉に入らねばならない。

以上のような現実とは、日中友好の派手なゼスチニアにもかかわらず、実態としての日中関係にはまだまだ困難が横たわっていることを示唆

しており、日中関係の本質を冷静に直視していれば、それは当然予想できたことなのである。経済関係でも、大型鉄鋼プラントの輸出商談がまとまったり、中国からの原油の輸入計画も発表されて表面はにぎやかだが、まだまだ個別的新ニュースの域を出てはいない。たとえば、原油百万トンはわが国の年間総需要の二百分の一の量でしかないのである。

半面、生糸輸入や肥料の輸出などに関しては、中国側が価格の面でかなり強気であり、今春の広州交易会で中国製品が対前年比大幅値上げになっていて、衝撃を受けた記憶も新しい。先日、日本貿易会が指摘したように、取引上で日本側が不利を招かざるを得ないような問題点も出はじめている。そのためか、経済界の一部に台湾、韓国へのUターン現象も見られ、そのことが問題を引き起こしている例もある。

もとより、こうした諸点は、中国側のみ問題があるわけでは決してなく、むしろわが国の側に中国ブームに悪のりした面があったり、中国の厳しい現実についての認識不足や、安易な「中国市場」論に基づく過当競争といった面があることをこそ指摘せねばなるまい。

一年たつて中国ブームも一時のような過熱から脱しつつある今日、日中関係の堅実な前進のためにこそ、日中関係の本質とそあるべき姿とを、冷静に再検討すべき時期にきているようである。

双方の利益を

そこで、日中関係に限って考えると、これは一時的な友好であってはならない。子々孫々まで、長い期間にわたる平和と友好の関係を築き上げていかなければならない。その点からいうと、昨年の国交回復は終わりではなくて出発点で、これからの努力が大切だと思ふ。

日本の方からいえば、とくに経済界の人たちがどんどん中国に出かけていって、経済交流が非常に拡大している。経済関係の緊密は友好のもとになるから歓迎すべきではあるが、ただもうけんが



劉希文代表団の来日

ために、いわゆるエコノミック・アニマル的な考え方で臨むなら、必ず失望するだろうし、けつして長い友好関係を築く道でもない。やはり日中関係をよくしていく、つまり双方によい結果をもたらすように経済交流を進めていく——ということをよく考えてほしい。

五月下旬にヨーロッパにいて、ロンドンでアノルド・トインビー博士にお目にかかってきた。トインビー博士は、日本はどの国に対しても平等の関係を守っていかなければいけない。つまり小国だからといってあなどったり、大国だからといって迎合したりしてはならない。たとえば経済関係においても、双方にとってよい関係を発展させることが必要だ——という意味のことを、しきりにいっていた。

中国側がよくいうように、今後の日中経済関係は互恵平等と有無相通という考え方、これは日本側からみてももつともだろう。大きくいうと、日本は技術が非常に進んでいる。しかし資源がない。中国は資源はある。しかし技術は日本よりおくれ

資源と日本の技術をとくに生かしていくことができれば双方の利益になる。双方がともに利益になるという立場で、これを結びつけていくことが大切だろう。

交流を通じて……

経済のほかに、スポーツや文化の交流も盛んになってきたし、さらに盛んになっていくだろう。もちろん、日本と中国の社会体制とは全然違う。われわれから見ると、日本のこの自由主義体制、資本主義体制にはすばらしい長所がある半面、欠陥もある。自由主義、資本主義体制はもちろん完全無欠なものでなく、現に、半面の矛盾、欠陥、マイナスが近來非常に目立ってきている。そこでこれを是正してよい社会をつくっていく一つの参考に、中国の社会体制をよくみて、そのなかから、われわれに欠けている面を取り込んでいくことも必要だろう。身近なところに社会主義の国があって、仲よくしていけるということなら、われわれの社会体制の具合の悪いところを直していく方式を隣国からとり入れたらいい。

社会主義国がある程度まで発展すると、社会主義の自由化をやっているように、自由主義の国も自由主義の社会化を進めていかなければ、欠陥は補えない。その意味では中国との交流は、ひとり経済のみにとどまらず、日本の社会をよくしていくうえにも非常に有意義ではないか。